

「独創自立」の90年

Ninety Years with Our Corporate Spirit “Be Ingenious, Be Independent”

川田テクノロジーズ株式会社
Director and Senior Adviser,
KAWADA technologies, inc.

取締役相談役
川田 忠樹
Tadaki KAWADA, Dr.Eng.



山高きが故に貴からず

川田グループは今年創業90周年を迎えることになり、このところ社内では記念品を作ったり、社内報で特集を出したりして、一寸したお祝いムードになっている。

だが企業は、単に歴史が古い、長い年月を重ねてきたというだけでは、決して誇れるものではない。

山高きが故に貴からず
樹あるを以て貴しとなす

我が国では昔から、たとえば江戸時代の寺子屋などでも、山はいかに高くても禿げ山では価値がない、樹木が繁って初めて価値があり、貴いのだと教えられてきた。企業の歴史を山の高さにたとえるならば、さしずめそこに繁る樹木は、我々が社業として積み重ねてきた社会への貢献、その製品や実績ということになるのだろうが、そうした意味でなら、我々も数多くの立派な樹木を繁らせてきた。

橋では、世界一の明石海峡大橋を含む本四連絡橋の数々、また横浜ベイブリッジや東京のレインボーブリッジ…、そして極く最近竣工した東京ゲートブリッジに至るまで、それこそ枚挙にいとまがない。

建築・鉄構の分野でも、世界一の独立像としてギネスブックに登録された牛久大仏、日本最初のドーム球場・東京ドームや日本最初の開閉式屋根付球場・福岡ドーム…等々。また平成に入ってからビル鉄骨では、新宿区の東京都本庁舎、横浜ランドマークタワーをはじめ、次々と日本一の高さを塗り替えてきた超高層ビルでも、その多くものに我々の製品が採用されている。

鋼構造に対する特殊コンクリート構造、PC構造の事業でも、数限りない成果を挙げている。中でも我が国では数少ない純粋国産技術、プレビーム工法を開発して発展させており、同工法の施工実績は既に1000件を超えた。その代表的なものに、台湾の大直高架橋（橋長1130m、幅員27m）などがある。

実はこのプレビームも、我々のPC事業のごく一部に過ぎない。つい最近まで工事中かどうかで世を賑わせていた八ッ場ダムで、しょっちゅうテレビに映っていた高橋脚上に架かる大きな橋、あれなども我々が施工したも

のである。PC分野でも、我々は数え切れぬ程の樹木を繁らせてきた。

人肥えたるが故に貴からず

冒頭に掲げた「山高きが故に…」の訓えは、江戸時代の寺子屋の教本「実語教」の中にあるものだが、実はその後には次のような言葉が続いている。

人肥えたるが故に貴からず
智あるを以て貴しとなす

こちらの方は近頃のように飽食の時代を生きる人々には、多少の説明が必要になるのかもしれない。

食べ物が十分でない世界、飢えが日常生活の中に存在した社会というのは、かつては至極く当り前のことであった。そしてそのような社会では、十分に食べて太ってられるということそのものが特権であり、したがって「肥えた人」イコール「貴い人」ということにもなったのであろう。

そういえば正倉院の御物に描かれている仏画や美人画はもちろん、源氏物語絵巻などに登場する貴人達も男女を問わず、皆ふくよかな顔付きで描かれている。

また私の個人的な経験でも、若い頃に訪問したさる国では、女性は太っていることが美人の条件だと教えられた。したがって男たるもの、結婚したら夫人を太らせておくことこそが甲斐性であった。

ところがこの「実語教」では、人は肥えているから貴いのではない、智を備えているからこそ貴いと教えている。しかもそれは、知識(knowledge)の「知」ではなく、智恵(wisdom)の「智」であった。

人間は考える葦である

最近の科学技術の発達には、まことに目覚ましいものがあり、30億個はあるという人間の遺伝子情報(ゲノム)は、全て解読され尽くした。その結果驚くべきことに、人間の遺伝子情報の96.1%までは、チンパンジーと全く同じものであることが分かった。彼と我との差は、僅か3.9%で、4%にも及ばない。

ところが今となつては、この4%足らずの差が余りに

も大きなものとなっている。それは明らかに人間がチンパンジーと分かれ、森から地上へと生活の場を移し、二足歩行に入った時から始まっている。

森を離れず、樹上生活を続けたチンパンジーには生活環境の変化はなく、従ってまた進歩もなかった。

ところが地上に降り立った人間には、猛獣に襲われるという危険をはじめ、飢えも、寒さも、安全も、それこそ樹上生活では考えも及ばなかったような環境の変化や危機に見舞われて、それと戦い、それらを克服しなければ生き延びてはこれなかった。

こうした無数に近い悪条件を、一つ一つ克服することを可能にしたもの、それこそが人間の智恵であった。智恵があればこそ人間は、火を手に入れ、道具を使い、狩猟、採集から定着農耕へと進み、さらには文明や文化を創造して、ついに今日の繁栄を享受するまでになった。

人間は一本の葦にすぎない
自然の中で最も弱いものである
だがそれは、考える葦である

17世紀フランスのモラリスト、パスカルはその著「パンセ（瞑想録）」の中で、この世で最も弱い存在である人間は、「考える」ことによって最も強い存在たり得ると喝破した。

まさに人間は、考え、智恵を働かせることによって、地球に存在する生物生態系上、その頂点を極めるまでに至ったのである。

独創自立

今を去ること90年前の1922年（大正11年）をもって、川田グループ創業の年としている。この年創業者川田忠太郎は35才で独立し、鍛冶職川田組の親方として、鬼怒川水系の発電所工事現場に入った。

もともと彼は、野州（現栃木県）烏山藩の御番鍛冶であった祖父の下で、10代の早い頃から刀鍛冶として育てられてきただけに、腕前の方は確かだったようである。

この創業者のエピソードとして、削岩機用ドリルの「のみ（鑿）接ぎ」の話が伝えられている。ダムやトンネルなどの工事は、まずドリルで岩に孔を開け、そこに爆薬を詰めて発破をかけることから始まるのだが、この時ドリルに付ける長いのみは、材質的原因もあったのか実によく折れた。

折れたのみは接がねばならぬが、当時は折れた両端を炉で焼いて、それを重ねるようにしてハンマーで叩いて圧着する、「鍛接」という方法が専らであったが、問題はこうして接いだのみが、その同じところでまた簡単に

折れてしまうことであった。

ただし、我等が創業者の接いだものだけは違って、「川田の接いだのみは二番でしか折れぬ（接いだ個所では折れない）」と言われたそうである。

当時「のみ接ぎ」は、発破を必要とする現場には無くてはならぬものでありながら技術的に難しく、それだけに創業者の技術は極めて高い評価を受けたようである。彼はまだ20代の早い頃からその技術をかわれて、当時日本一の産出量を誇って盛況を極めた足尾銅山に雇われている。そしてそこで働いた数年の間に、将来独立するために必要となる資金を稼ぎ、また終生の伴侶となる妻いとを娶った。

思えば創業の時以来、我々の歩んできた道は「独創自立」そのものであった。削岩用ドリルの「のみ接ぎ」の例のように、初代川田忠太郎が身をもって実践し、二代目忠雄はそれを経営理念として揚言し、社内に定着させた。

独創自立——智恵をもって問題に立ち向かい、技術的な挑戦を続けてきた我々の歩みは、少なくとも「川田技報」が出版されるようになってからの三十数年については、遺伝子情報（ゲノム）宜しく、この「技報」の中に記録として残されている。

最初の頃の「技報」は、当然のことながら橋に関するものが多かったが、最近ではその特集記事のタイトルを見ても

- ・社会のニーズに応える環境事業（2006年）
 - ・鉄構技術の歩み（2008年）
 - ・システム建築の歩み（2009年）
 - ・情報産業 ICT ソリューション（2010年）
 - ・次世代産業ロボット NEXTAGE（2011年）
- と、その内容は一段と多岐にわたっている。

しかもそれらが、単に対象が増えて広くなったというだけでなく、内容的にもレベルの高いものとなっており、そのことは我々の

「川田技報」を舞台に活躍した社員の中から、これまでに30余名のドクター、工学博士が誕生したという結果にも示されている。こうした社内誕生したドクターの中には、母校などの大学で教壇に立つ人もいるし、コンサルタントとして活躍する人も少なくない。

これらのことは全て、我々が培ってきた技術、智恵の営みが、それなりにレベルの高い立派なものであったことを物語っている。「独創自立」で歩んできた、90年の歴史の成果と言えるであろう。（了）

独創自立

川田忠雄・書